

第 13 回全世代型社会保障構築会議 意見書

2023 年 2 月 24 日

株式会社経営共創基盤

IGPI グループ会長 富山和彦

1. 根底的な問題は働き方、生き方の変容性と多様性に否定的な現在の社会システム

少子化問題の根底にあるのは、日本型メンバーシップ正社員雇用制度を軸とする社会システム、社会的セーフティネットの仕組みの耐用期限の問題であり、少子化対策を働き方改革と関連付けている政府方針の方向性は的を射ていると考える。

その一方で、この問題の根は深い。明治以来の工業的近代化の過程、さらには戦後復興から高度成長期における加工貿易立国モデルにおいて、男性を終身年功制のもとにカイシャに従属させ（その代わりに定年までの金銭的な世帯的生活保障を行い）、女性をイエに従属させて社会的な世帯機能である子育てと家事を担わせ、これが大量生産工業化モデル時代に見事に機能したのが、いわゆる日本型メンバーシップ正社員雇用制度を軸とした我が国の社会システムだった。しかし、このシステムは 1990 年代以降、DX とグローバル化による破壊的産業変容の時代に入り、社会的にも女性の社会進出や働き方、生き方の多様化による変容が進む中で、明らかに機能の耐用期限を迎えている。従来の仕組みは産業も社会もゆっくりと小さい幅で変容する空間においては、同質的、平均的集団による改善改良、集団的オペレーションに好都合なのでうまく機能するが、かかる空間はどんどん減少し、その包摂性も有効性も低下したことが、30 年間にわたる賃金上昇の停滞、非正規とその周辺での貧困問題の深刻化、さらには少子化の加速につながり、今や国家社会全体の持続性に赤信号が点滅し始めているのである。

2. メンバーシップ正社員雇用モデルが陥った深い経路依存性の罠

この脈絡で言えば、正規雇用の女性が子育てから職場復帰する際に生じる L 字現象の問題も同根である。終身年功を軸とするメンバーシップ型正社員雇用が基本（あるべき「正規」な働き方）である限り、どんな施策を講じてもパッチワークに過ぎず、少子化対策として根本的かつ持続的な効果は得られない。メンバーシップの名の通り、この仕組みの「正規メンバー」は、新卒入社し終身年功で当該企業にフルタイム、フルライフで働く人（だから多くの場合は男性になってしまう）であり、そう言う働き方、生き方をエンカレッジする雇用慣行、労働慣行になるのは合理的、必然的であり、そこから 1 年であっても離脱することは極めて不利にならざるをえない。ましてや複数の子供を産み育てることにコミットすることは、数年にわたり正規メンバーとしては休会となり、男女を問わずサラリーマンとして大きなハンディキャップを負うのは当然である。太宗の日本企業の停滞ぶりから分かるように全体としては極めて非効率、非生産的な結果になるのだが、そこから脱却できない強烈な経

路依存を生んでしまっている雇用形態なのである。したがって我が国の労働市場のデザインがこの雇用形態を基本とする限り、そもそも女性の多くが働いている非正規雇用の諸問題は言うまでもなく、正規雇用のL字問題も本質的には解消しないし、全体として女性の希望出生数の低下も止まらないのである。

3. すべてのステークホルダーが本気で包摂的な社会システムの構築を

大事なことは、国の制度、民間の雇用慣行の両面で、正規か非正規か、メンバーシップ型雇用かジョブ型雇用か、フルタイムかパートタイムか、転職するかしないか、男性か女性か、法律婚か事実婚か、など働き方、生き方に中立的な仕組み（賃金、処遇、福利厚生、税制、社会保険、リスクリング支援・・・）に可及的早期に移行することである。今、恵まれた立場にいる「正規メンバー」の側の人々は、労使を問わずその特権にしがみつかず、その外側にいる人々（既に正社員の流動化が進み終身雇用が崩壊しつつある中小企業領域、正社員であっても真の「正規メンバー」として扱われていない女性、国からも企業からも守られない非正規やフリーターなどを合計すると、おそらくこの国の勤労者の8割くらいは外側の人々）にとって中立的で公正な仕組みの構築に本気で全面協力すべきである。政官労使のすべてが、できもしない「一億総正社員化をもう一度」みたいな建前論を捨て、変容と多様化の時代に包摂的な社会を構築するため真摯かつ現実的な取り組みを行うことを期待するし、私は経営者、経済人としてそれを実践していく覚悟である。この根っこの問題を変えられなければ、この国の少子化問題は根本のところでは解決せず、早晚、我が国は国家社会の持続性の危機に陥ることは間違いない。

ちなみにこう言う議論をすると、「日本社会の伝統的価値観を否定するのか」と言う反論がよく出てくるが、そもそもここで指摘したカイヤモデルも、イエモデルも、明治以降に人工的、政策的に作られたもので、人口全体の10%にも満たない士族社会においては昔から「藩」や「お家（いえ）」がイエでありカイヤであったかもしれないが、大半の人々は村落共同体や長屋共同体の地縁の共助システムのなかに緩やかに帰属して、地域や職種によって多様な働き方、生き方があり、専業主婦のような女性はほとんどおらず（庶民階級の町人や農民の女性はなんらかの仕事をしている場合がほとんど）、職種や奉公先についても流動的な生き方をしてきた社会である。それは歌舞伎の「世話物」（江戸時代の現代劇）を観れば一目瞭然である。そう言う意味では、ここでの議論はむしろ真の意味での伝統回帰、大半の日本人にとっては工業化社会以前の時代に戻り、そこからもう一度、令和の時代の新しい日本社会のありようを再構築しようというプロセスに他ならないのである。